

佐渡民謡

佐渡民謡は、この島で江戸時代（1603～1868）から残る伝統的な形式の歌と踊りです。この音楽は今も人気があり、佐渡島中の店やスピーカーで頻繁に耳にすることができます。この民謡は、生者の世界へ一時的に歓迎することで先祖の魂に敬意を払う、仏教のお盆がある 8 月に伝統的に演じられています。佐渡民謡の一座は、踊り手、歌い手、そして太鼓と三味線の合奏で構成されます。島では、高校生のクラブ 1 つを含む 23 のグループが佐渡民謡を披露して伝統を守り、次世代へそれを受け継いでいます。

江戸時代には、中央の徳川幕府が所有する金鉾と銀鉾を監督するために江戸（現在の東京）から佐渡へ奉行が派遣されました。奉行のために佐渡民謡を披露する女性たちは青い着物を纏い、顔と周辺視野を覆う麦わら帽子を被りました。表向き、平民が奉行やその他の高官を見ることは禁じられていたためです。この衣装も、そして佐渡おけさとして知られる当時の曲も現在まで使われています。今日では最も一般的な佐渡民謡のひとつである佐渡おけさは、かつては特別な曲でした。そもそも芸者によって披露されたもので、他の佐渡民謡の曲と異なり、佐渡おけさ用の合奏には笛が加えられています。